

## 周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

### 彌兵衛の誕生

出雲地方では後に掘り起こされた古墳や寺院跡の石棺や埋葬品からも判るように、石工の技術は他の地方よりもかなり進んでいたと思われる。それでも硬い岩で出来た剣山の一角を幅三十間（五十四メートル）ほども切り抜き、新しい川を作り、くねくねと曲がった旧河川を塞ぎ止め、堤防を築き、意宇川の水の流れを新川に流すのは、大変な難工事だった。

家正は現場に泊まり込み、河川工事の監督に余念が無かった。工事の進み具合を確かめるだけでなく、辛い仕事をする人夫同士の争いや、不穏な動きを見せる者がいないのか等、藩からの仕事を受けた庄屋としての気遣いは、大変なものであった。

そんな時、未明の河原を急ぐ人影が有った。提灯の明かりが忙しく揺れて、小走りに行く人影をときどき照らし出した。人影は、まっすぐに家正の眠る作業小屋に向かい、声を潜めて呼びかけた。

「庄屋さん！周藤の旦那さま！」

「起きて下さい！」

「なにごとだ」

家正は身構えると入り口の木戸に手をかけた。

「旦那さま、お喜び下さい。先程、宗因さまに御長男が誕生なさいましたぞ」

「なに！孫は男の子とな」



画 寺戸良信

「はい、さようでございます。早く旦那さまにお知らせしなくては、と思い夢中でここまでやって参りました。誠に、おめでとうございます。」男は、周藤家に仕える番頭の五助だった。五助は知らせを終えると、安堵したように腰の手ぬぐいを取り、汗を拭いた。

「記念すべき大工事の最中に初孫が生まれるとは、なんと、めでたいことよ。この子はきっとこの村を救う立派な庄屋となるぞ」

家正は、喜びを隠しきれなかった。

慶安四年（一六五一年）初夏の早朝に誕生した男の子は、祖父、家正によって彌兵衛と命名された。庄屋の周藤家の宗因に跡継ぎが誕生したという知らせは、家正を悦ばせ、難工事の現場にも明るい話題を提供した。

人夫たちにも振舞い酒が出され、工事現場の士気はいやが上にあがった。

意宇川の新しい流れは、起工から、わずか二年後の承応元年（一六五二年）に完成を見ることになった。

旧河川には新しく田んぼが作られ、村人たちに分け与えられた。

水害により、村にあれほどの打撃を与えていた意宇川も、今は恵みの川となったと誰もが信じて疑わなかった。

「何もかも庄屋の周藤の旦那さまのお陰だ。わしらは幸せ者よのう」

「庄屋さんは頭のいい人よのお」

「わしらは周藤の旦那さまに足を向けて眠ることとは出来んぞ」